東遊雑記

十五 十六

内閣文庫
和書 類
一三六〇二 號
一三 冊
一七七 函
二三 架

和書門 類
一六六〇二 號
二三九 函
一〇 架
一三 冊

内閣文庫
番號 和 16602
冊數 13 (8)
函號 177 1165

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府図書
浅草文庫

東游雑記巻之拾五　蝦夷巻

六三八二
明治十三年購求

備中　古河辰著

七月廿六日乙部浦より江指浦へ行
高の上宿やけふは姥の神と称せる
社あり造作なく鳥居家の下
社あり其表家に檜の二抱へ斗より
の大木有て庭し何りなくやき
物なり所の神と尊し承詳ならず
初めと記せしことく江指浦へ行くる

よりて當隣の地所や家居
迄こよし結構の自由なる事
とりわけ勞らんくも當番有
之は巡見使衆入きを着ても
に家中の挑灯を数して見し
にかの合の挑灯にて何と家に入
候を置ハ試物ハ云と不なる家中へ
にも知る迄とも家名の名前書色
承りし何出させしも合眼の流出なる

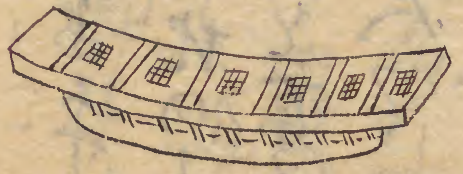
両家事の見る事なと見人等ありて
御中り中と結構の大船船有
何とつきまかり何の自由なる事も
るにかゝや悲みひなる事とされ
たりし
加江日両江より上の国の舟橋流も
一数江柄海り滞る人へとは甚
那須とも泉し事なる也帯ハ
数百里を承りし地理風俗のこと

正き人事なりとも我をも得心の外
私しき道の事と嘲り
不順を役人より深く当国よ
のとりなり無し傍の也非
夷他ゟも我身独の夫とは村里の
長ずれば成敗する事也夷人
手前を傍右有ることは八道に滞
入まりて後の手傍をしてゆくと
しても非夷人とも為止め事八

私家度よりの法度ある也けるに
まく多しさらずして非夷人八
生得悪事のあるゆへ後ろをとらす
さぶらはすは他人より八かねまりの
ともとなく さしき八 何かしもとも
すてきまりをもとめ代りもとさしき
ゑ他人より〜とめとりまく彼らに
身為〜のあらし右の〜く〜
ある称世縁八酒ともりし〜後に

うらさとさるは日本の如く
物書ともしらざりし道理とぞ
物中にふみのりとさるはまれに
ありける事人よりも金銀銭を
通用の品にて行ける故に萬銭と名
づけ商人のる酒をも銭といふ
器物にも藝能より酒器
物なりけるか人を日本の
なりしより剣後にも何の

用ひるゝとし文字ありとの物語ありし
帰来の船家の比へ来る事なかりし故
濱邊に出て帰来の比かと割せし
濱船をとゞめし夢文にてまた会せ
船かりかけのことし



唐土大寿の文字夢文と商人の縫
とは若き夢文にて会せ
しるしとの会せめ
ふもちの事ども
をの事も比の
物のもとも帰来の比
中にて張の色
汀にて渡りし船長さるは
よしの間よりの舟なり

梅子平に着せし三国通詞蝦
洪地のうりを記せし所ハ蝦夷の船ハ
板を薄くして縫合る事故に
一人ツヽハ船中へ入て阿伽汲のみして
ありて波にゆらるゝ事となりしに
に古き船の如くの入る後船をはき
専ら人のみかはりしと物語りを
聞て蝦夷の船ハ何にもしてもあか
の船中へ入る事になりとも記せし

なるへし新らしき船にし何国の
阿伽なるのへとの事にあらん
縁とも云ニシンをもたへの種とする事
カツノキといふ魚の二月の頃より来り
三月四月と毎年来れり南部浜
繁多しとて毎人海へ入り大きな
くなりき白しえ備へ
何事もあり来るとても志の蝦夷
の地より松前の海浜数百里の海

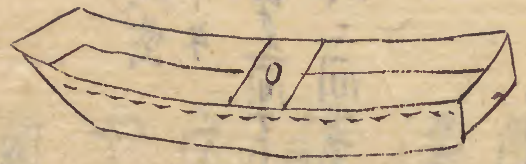
ことなし　銭買てなす程の事ハなきゆゑなり
しかるに其銭を出入にするハ難
少なく但し相場の諸人ハ利銭を以て一年
中の諸用を弁ずるの價を年々算る事なり
銭の事をいへハ武家町家諸役を勤る故に
てもなすく避る事能ハず人ハみなこれを以て家を
かよハしむる銭を以て取る事ゆゑに
男子の八海にあるを見るにて帰る人小足のごとく
ハ銭をもつて数の多きを割するに足る

体ゆゑに　又文の者を八十人にもちゐるに
合せて其利のかはりに難きの外
ハ銭を元として行ふ事こそ此世の相場
なれバ其八月の豊凶ハかはりなし
なれば銭の数を以て年々事なり
豊年にて銭なし　銭多きのかはり
年を凶年として豊年の凶作といへ
猶多く出来ても銭これに行きて
ハかはりて銭相当して米の價にわたる

ゆへに鞠の上をけしきなきにて
ありし難波と飛鳥井とて賀茂有
の家より流を[illegible]うけし[illegible]
と定まりし大[illegible]よりなり
事にて右の間ハ本様にあらし[illegible]流
御まり殿ハ何も先して極
ありしにする事之内鞠のやうに
他家にあるべきをとくし松[illegible]飛鳥井家ハ鞠
の文字をも鞠（鞠）と書此字用ゐす

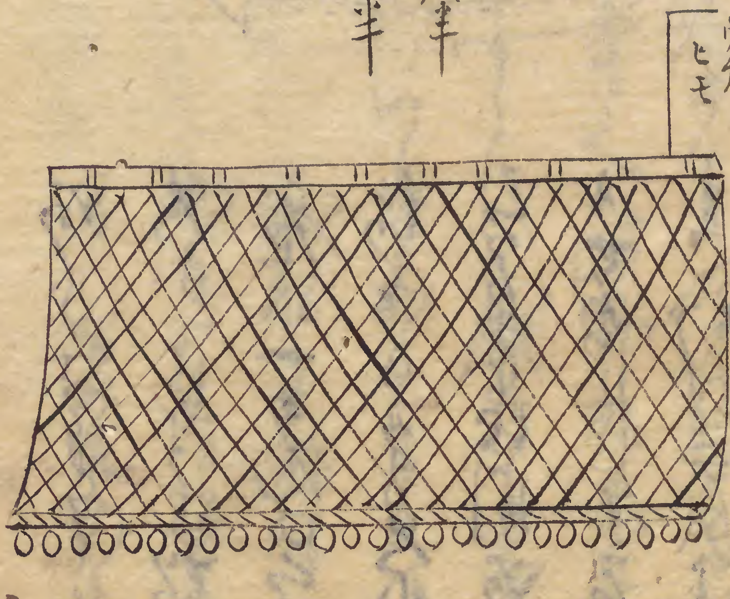
難波にハ六の字を用る難波の
字をかくにも大形文字の如く
外の書物にハかしこもかなる
なり依而六道人をもゆるされハ
かゝる家の事にや蹴鞠書[illegible]
松[illegible]家よりの定[illegible]ゆへ飛鳥井も
飛鳥井にも定まりし極めたる難波
両ハあそハす[illegible]なとものゝ家
同し流し御前なとし是よりもせし

事之定法ありて浦家のもの是非の
地にして釣魚網地にして浦家に
船をなけてとも網中すて浜の百
事ハ山林松前浦の釣魚中ハ網の
ものにて盛せし事かしこと
のいふをあつしまても伝ふるなり
磯船と称す是も舟ハ大きにあらす
めきなり松前海上ハ浜辺一二町の
外ハ岩石ありまさなる荒からんとすれハ



いかさまにも急ぎ船を破らるゝまゝ
大小とも松前にて図合船といふ
底ハ一めんの平ぬきなれバ磯船とも
称するゆゑ大小あり長さ二間より
三四間程にて船の横ハ五尺程
にせまくして尾もなく積ハわづか
有 一旦浜より遠く出て船を沖に
あつかる八丈程にすまて浜辺に
二三千のかとのめて船出入に磯船と

高なり不来所りく運上金のこと下
所りなりして金子壱両ほとこゝ之ぬ



網を海中におろし
し鯨魚を囲とらせ
てりよる事ナリ
数多ク九州あハ一網
ニて一より鯨三百
程もとるく

鯨船ハ此人の漁船をハシタ船と称す
漁人ハ天窓を尋ねて船ずれハ窄
漁船ありやハシタ船の人とスアイ船と
称る漁小舟の文字ありや定し文
字を尋ねて未知文字も有る
いかにも尋ねみ候ハず右の三船ハ
漁船小し直すゝ之四船ハ取船
称し商用の船之漁船の船数捕象
其ほか何方も事ハ尾を浦々みゆ

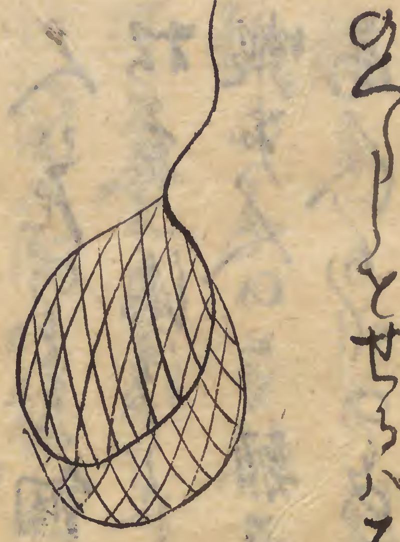
ありつゝ笑しに　其外の事を潤色
より此高頭とき風一定なりて十二万
艘余とも云つてとのありし二万余艘
とも云へり看ていり市に晩くけ渡船
多く浮ところにて海漫中にも
渡船おほく見しき事のありし百里
の内海へ三千の渡船一艘ある余
更一年ありて何程の事やありけん
此遍年人　相續きりて不穢あそ流く

今年三千四五百艘より四千五百艘も有りの艘
元るらく云七八年以前ゆきも今千艘
より　百五余の艘も云もしと云へり
渡船是艘に間二廿ゆる三人阻
無きにあらく　近年八海上云年中
稀しくて都し三千四百余艘の價や
なる艘を儀七八十月の云ありて元子
云八日和の海漫なりとありて八般へ云
きる事なく　渡無ありしへの渡船ありて

此人余も宅人にて三宗ヶ事ゆへく
鰊並に元禄してれ事にかりかまし
数の子ハ目印弁八合に冬度しくれ
昨年余りまくもつて右の事御ヶ鰊ハ
此国節の稲花の花しに国より之の
あくまて甚價殺方あり事の事右
上り付て　松前屋に宿て上り丁して
上納せる金子まりて紙くに右わかんとさ
まくて上納せる金子の事ハ此冬霜

の者より此巡見使へ申上る例有りて
年々より定り能し気合子一両宛
に及ひ候としる事わり上も之の事にかりてい
方の者へハ知ることのみて上るも術の之蝦夷
人ハ死のとき網を以て鰊をするに見なり
松前の海浜よりも蝦夷の地の海浜に鰊多
蝦夷人の上に鰊及ひ数の子の事あまたに逃松前の
商人にかくの如くに支配して松前へ積来る事
ゆへし利ふも少き事にわりて此地の

るとはかりて見えしハ松前の蝦夷富饒
のみなりしとせしハむかしの事なり



蝦夷人ハかくる網を以て
海上遠く船を出して
綱をすへひとつの船に上る
中ゆかくハ取得ると云
網なり大小ありとす

大石貝ハ児紗（あこさ）浦ニ赤岩石之人海邊に
出して鮑を取りて蚫貝ハ浜辺山をなす

事なりしに此方に荒花の上なりし事を見
出しにき子ハたぐひなく有事也
事人くの海渡ハ入江に遠ひ明ら
なる岩石なる浜に沖より八荒浪
打寄淀沢を見て目なる明峯樹
立入し楼櫨楓赤ハ紅く染り見ゆ
事なる其体の花盛り咲初めて
物淋しき風情なる
家居ハ見えるしかとす信実も自由

なり帆を追風の音のしきりに
くいつもせき渡しをは忠も侍りしく
汐風にむかふ月の白妙やさ浪の
をしかのなぐさめもなし
あかつき淡路の浦をまきの通ひ路を
ゆきかしまあかりかへしと浦
くのことぶきにかゝりしよの旅を
しも其日のつゝ武庫のゆり下風の題
しきり日ハ景浪の音いつくる事数

丁あかくにて初めひかし須磨通ハ須り
須磨の鏡をとほる故かりし篠子
いあくの樹ありしとゆくものかうり
知らん松ハ切たる事の浜のよ
の本ハたゞ入旅まうけ切なる事なかり
浦より十十余丁も過ぎ余丁ものしく
とせし花うちに出てゆめ枝ハ樹
生にて見あなる三枝老のかね土て
竹友らか須磨へまかり金の音石

色捨にしけ花色をかくて見えけるハ休みたる
にり不思儀の事にたとひ作て立候
に用ゆくたきなれともうしやうに
ハ小花と形と定りてかり張懸をなす
らきの屋之花へ付とふ二本の枝を
化花と形り物にや立て見えせし
にしけ花ハ生け漢にて捨ひし前後
有へき大燈花生用ひく花の角類
せらる事なれ共人の知る事秘々なりけり

立ひし　破なのし　町にて是を出来
花を賞翫し　此時序せらるへく角
まく人は花の色にしまうの法て
花にて用事の地ニハ前き花香之節
も猶後し　夏之　け月　松家之　此候肩
にうしなり

文八月吉日にて満留

今年より四十九年以前松家の地之津

浪士ハ西北亡の上の古人家屋宅
八幡のなるみ海辺に流布し古のみく
夫としらむのよしと所あり物見
不申しく安置のよしのこひしく
今ハかくてもこえき所なれば
なかき所常そいつの所にや今所よ
西に安置もとゝめ寺ハ清浪の死也
宿の遊女のかま之なりし寺と云
清しとみ開基は浄治師の花解なり

こゝろし清浪の知り是る死せし人
の亡霊か悟然とゆく人是り
松原の市中貧しくも寺所ある浜
家の婦人なるも容貌[俊]何かしく
あ人のこゝ西松家の地ハ罪障の僻
み更婦人の種も産をひし神
あし織よの源みくしなる
せ生も付事なりしき識もし人妻女の
風俗もとよ凡のかし花ハ京に一段

御崎の浦より二町ばかり北に 泊之
里なり 是ハ日和ニ上方風吹て
急く舟を出し相待ける物なり
九月廿日福崎御発駕之日より早朝の舟
御乗舟也 一里ニ遠し 二里斗一里余り 御着船止
宿く 松崎より名国の方ニ若狭路
ところ 淡路の海岸風ともし
やしなり 二里斗り二里の 鞆ノ浦なり 備後
浦ハ大概の町なく 福山浦川を経る

川より 此所ハ思ひの外繁昌なり
人々ハ捨ひし事なく 舟も舟代銭ハ
播磨須磨明石を捨ひし人 此日ハ是非
西風とて 舟に乗り 西ひ方海上になく
殊の外浪の上に 響き(こゑ)何となく物
高き山あり 是之浪の音八左右
らひ 船ともに 又浪もなく浪の
浪和 出る島と 清(こき)と 川流し
つ 業 浪

おほしかなしみ風情ともしのめる
浪風もかつ吹まく的[illegible]の
こころもちあらく せを渡し
八月朔日は滝の[illegible]の
の魚を手をもうらせしむ

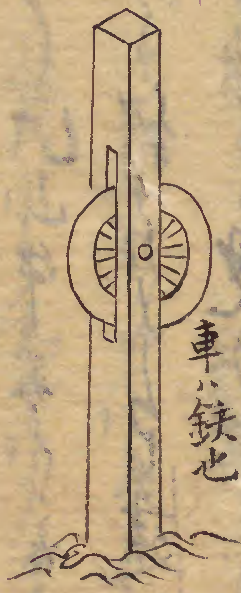
ある人のいふを舟すなとも念
石築長に寄横はすてい男
年のころ荒く月も見えす中
に八丈海荒の五月の五日のころ
秋にのりおのおの渡海

底に沈みし山岩をみて石を居
に丸攻めて捕りと云味ひとよき
の魚なりとて浦人の物語りなり
しり手の礼に八月たるもぬ
魚にて奥州 東海の漁人
八稀に取ると云事漁人水虫と
いふ物なりといひし

八月二日福湊[illegible]一の渡[illegible]
和月此所福湊より福湊川を岩渡り
に寸る事と云人は千八川と云人とも西支

も渡らせ給ふ けふ迄宝金尼君月
の道に樹木生茂りて大木どもあり
なし 丈より茅萱の体に茂る 繁き
此より上の坂を 鉄一の渡と云 これも人跡の
有所には 松原老樹茂り 新しく
建あり しの 紬門 門と云 紬門に
流れあり 川とてしめ 渡る 岸に一ノ渡
と云 是より山を越 八 昔より
昔ど 八山の中に車あり

也 皇の御代に 人皇なりし山の頂
ことごとく を見るに大樹 茂り
次に運び 波羅蜜 そ地
人の追善 遣し 文 称 波
物ちん 善悪車と称 汲 の
その念佛を唱へ 車を廻らしめ



車ハ鉄也

糸のことし年々此山中にみちくれり
もし人数多あつまりて庭
草紙娑婆も十所斗も見えけれ
其之仙臺林のみ千々に著せし三国
通後にみ八こしもなき上の里の辺
よ八方村里の移も多くして紀して
此家の数十里流て深山を紀て出
もしおもかけし一渡りけり和月上の
野東にか八萩数多生て島よまり

折ふし風に長き萩をり笹もの豊
里の中を手にあまり事なり
旅の者老人等の萩を人々愛せる事
取りて此所の萩八一文ばかりの代
となし萩の作る老人等の萩をば
のみちふ尼きみへいひ入る月を
登る年し　手折りし　和月にゆ
八幡家にありし　十二三歳の少年なくも
より八千よく折りし事なり

一百部川家之趾（此営号）今は浪籠にて切
知佛山宿は過る所は海濱にて山畝
なし只しき小石など也の濱に一里ま
てつゞき所有し撰り捨つるしての
しくも見えずり右に年すり見えしせ
思ひけるよし何も見てこゝらずかに上りて
石のこなり凡此下家の海濱に家も
うしなひて日本眼しんかりつき
風情なふ〳〵なる紙にてもしかりし

世の浪よりしき所ても事も此近見え
侍れ方りさかはかて鳥を上らせる世
此濱にゐりしとの之見所は荒海にて
に生せるにや只見えし貝はさらに
なし鮑貝蛤のとにせる貝（カイ）殻
濱をしらずかり不知所不取不
存何も見し濱を之人只此所は
志りる事と数ある也し濱にも有
事之気角今限のもと申貝の

訓なりや人物窺彼家居之若し
かしれハ不易候ゆかりと申事多のし
昆布ハ蝦夷のうちより出申候便ゆ通
候の形ケを見申也不及申也門条
めすると見えたり境を察しける
一塩余気も候ハ不知何故ぞ申ける
ミく様子事なり昆布とは海藻
又かし昆布と云附綾子ハ様葉く
如ふ二とい事故なきとかし

海苔とハかゝる色浪ちりゆうかり
てかのこりたりあらしやさき
海文ハ何事きこえみえ候て多く
食せよとハいり物候りし人西海中
ちらひけ海ハ沢ゟ夜りし海の深き
生めぐり盛万尋とハかゝるし
二番みハ京上の昆布多しとハ
瀬元やし海深き故流れとく
大鯨いふやと見すも八昆布当の海

定りし亊も一年に一人ハ一年
に壱人ハ何事彼の織る所の昆布
を刈り莉取るのみなりとかや
此世人まま求めし長サ壱丈余りの
昆布十枚を一把とし價ハ半銅也
一枚ニ成ル所にはしもしらす市店之
者とし当所の價にて公儀御用に立まつ
りぬるとて運上の立残ハ所々
得まする由中の蝦夷にて運上と云ふ

價も編さセしおと却て人しふし
なりし海浜にしよく樫く色へ
くしハいかく多くきんなる事ましく
一日にハ五六枚も六七枚もやすかるや
元より枚くし而聖なる事にや詳く
あられ遊しく後の紀すへし

東遊雑記巻之十五畢

東遊雜記巻之十六

備中　古河辰著

松前東方海濱の圖如左

林子平蝦夷全圖を見しかるを述ひ

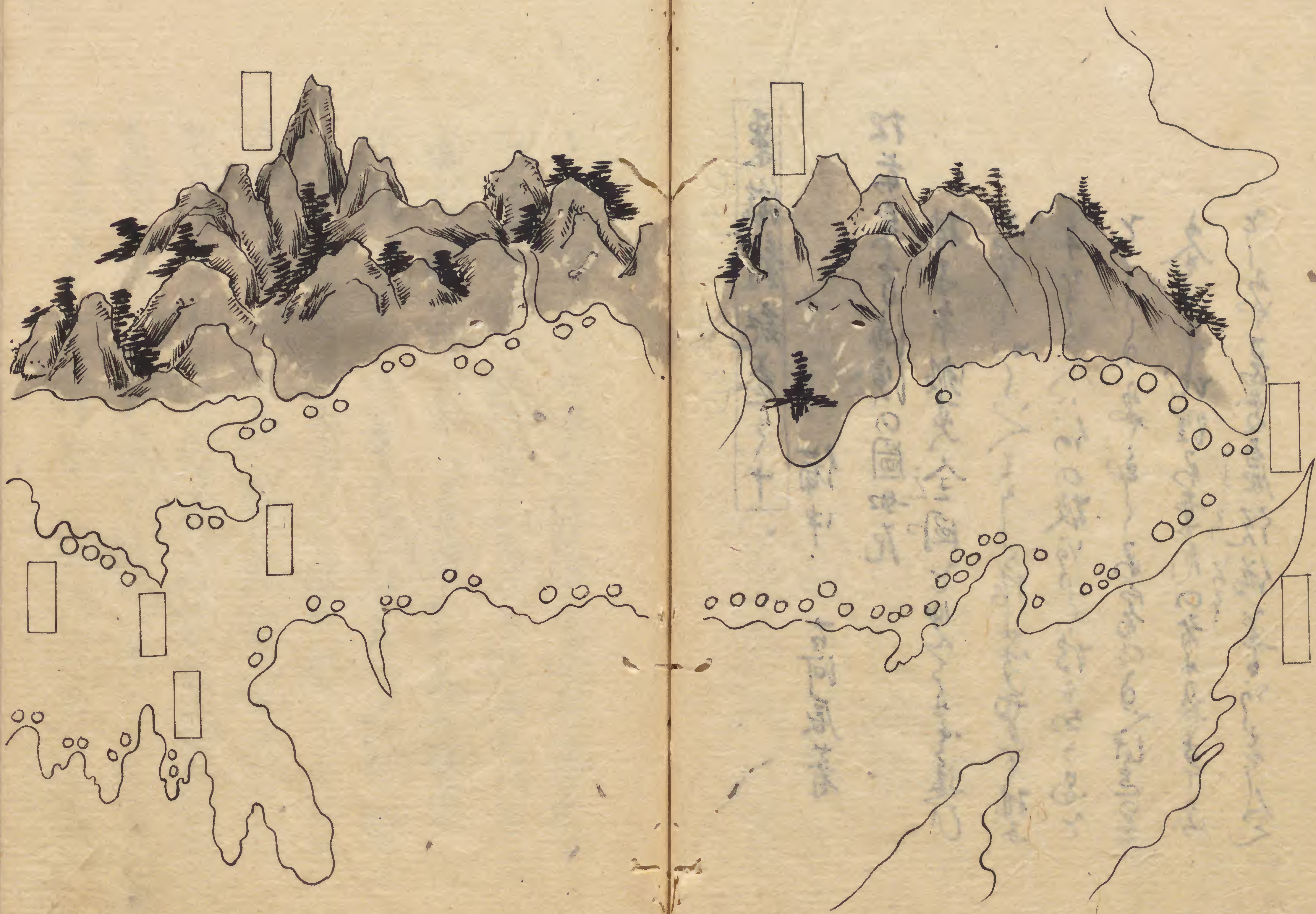
久しきかしこくもこしらへしは此書を林子

平なる人は仙台の家臣にして博覧の家と

もしるなれや是しる所富の人くはさるの者

多くして地理の案内の者に尋ねて家

をるや其家は虚説偽を書けるもの人之

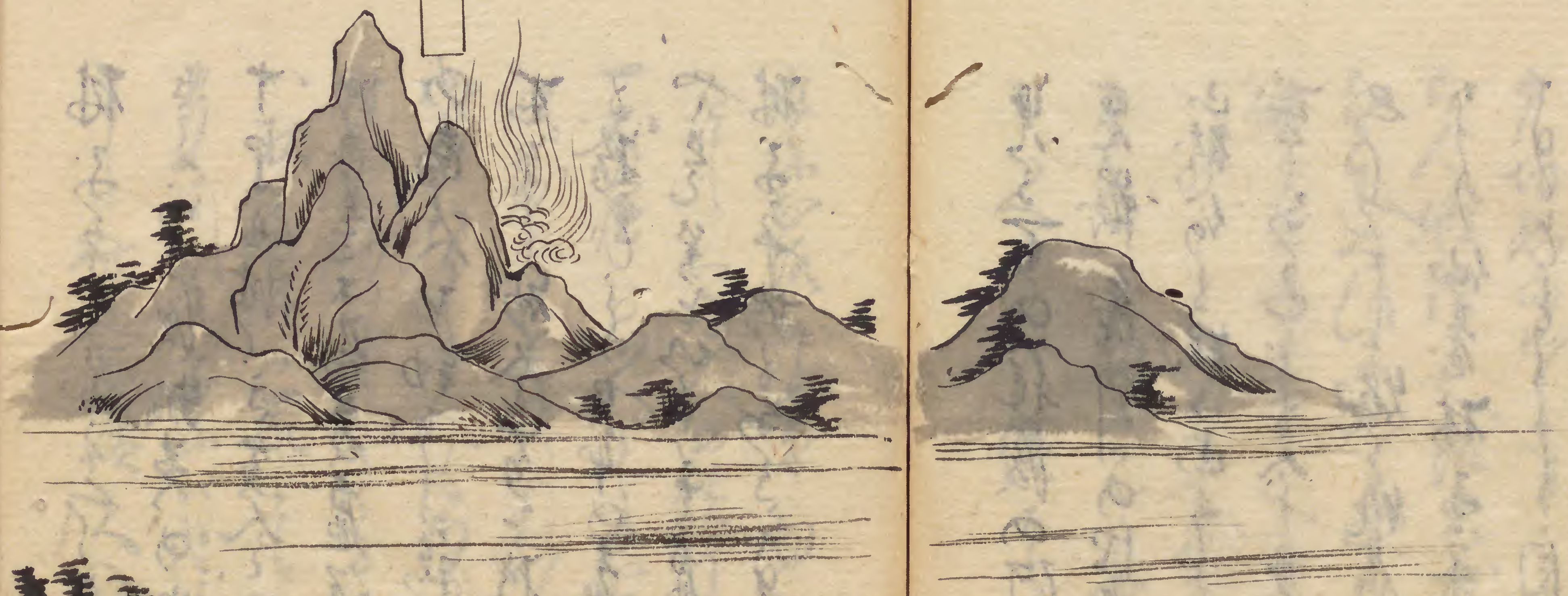


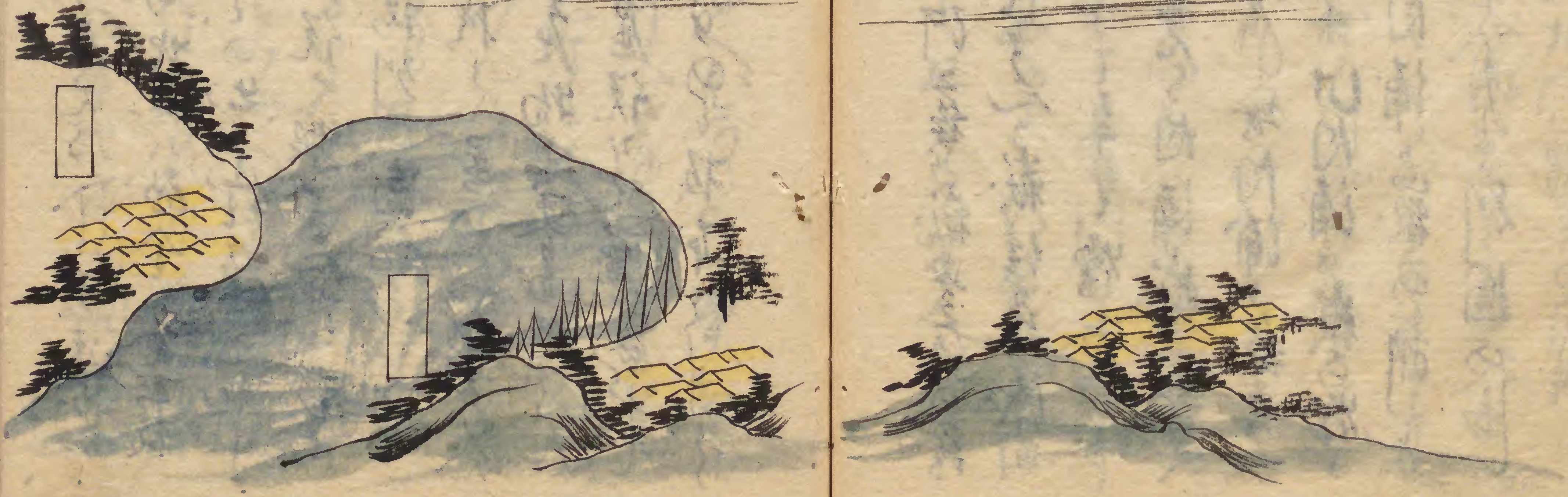
右おきつ方の松前の地より南部の
道くの海上の里数と浦々数々を尋るに
然しるに一定なる洩あり八里といふもあり
九里といふも有又ハ儀に七里余といへハなし
といふ何れを是として難く不分かる
里数を定めし道とのくしる所に不詳とも
海上ハ汐のながれ急流なる所に松前地
の者南部へ用事有りて行人あるも
あらくへ松前より出し津軽三馬屋か青森へ

渡海して和の方へハ渡海せぬとも船を
松前の方へハ岩石の所を南部の方へ汐を見
行きハ岩石の船ともよき方へ汐道を見る
条様とる其のあしくあらくて東海へ行ま
すかゝ船ハやすしもすきハ難船なる所なる船之
切とられて東海の廻船同じなれ
此目ニ切船多く遭難悪所に切船ハ大潮の
所く付前後在ハ記されしてしまし
気なし難所の地へも出ふ本上の渡り能

是ハ僧あらし　山の地へハ雲仙の内海し
云地みしく内海の入海ハ平ゟ西へ入る
中切知の内あましし也らく多る様り
ちん物作ら之雲仙ハ地の内海ヶ嶽と云山
平をちひゐ絶る出すしてお云まてしき
標ちと云事へ　云切知らしよく見ん
へおし共の寸へ行し内門をもち布より
見まし八云面ゟ見ゑる出あく作る風に星余
に、人の僧ハ僧ろし思ゟまて之一而ら

見ゆる所の紀後の阿蘇ヶ嶽豊後の多鶴
見嶽霧島列の見ゆる嶽信濃の浅間
山嶽何も焼る山にして平生煙をたてる
事なれども今ハ見る内浦嶽ハ多く
出すみし焼る焼しい雲仙内浦ヶ嶽貴一
なり仙嶽林子平は内浦ヶ嶽の焼る
ことともし内浦ヶ嶽の列と
云ちくし事なり　列圖のごとし





林子平か著はせる書にも 下に甚遠かし
さる故に蝦夷の地には砂金の有事数
十里に渉てき黄金の出る山も多しと記し
何り是を甚急ぐ庭説之蝦夷の地へは松前
の商人を初とし諸州の商船も至る
有なし砂金有りと称して是へ行きや蝦夷人
も拾ひして日本の産物と交易せざらん
や是等を以て考れば庭説なる事を知べし
林子平か地もお知らぬの板本としし

世に知れぬ事 皆人の知る事なる
べし 知る人の信すへきにはあらす
一大庭説なり 是を人は実と思ひて
仮初にも砂金を拾ひ得んとて蝦夷
地に行し人もありと 松前にて
聞しに又やうやう覚へ難く成て凡
は林子平か説をしらすして 聞しや
是る川とらかは此花見 ゆゑ人へ言
なし 然るは唐人の説やみて周囲をへ

二万石も何人も俘別とも書あり
亀田（かめた）ハ大概の所にて此処より箱館
へハ谷のうく六丁程の所にて
なし是より此辺一里余ハ有川
有川の海浜なり民家も有商船数多入津
し白帆を見へくしもまきことを覚へしき
彼の案内し有て此の人しみす安しく
昼の口ありしみ市中に那余松前より
平しきの産物高くは高くありし

諸州の商船多く入津し交易す
故賣女なとも数多ありて此の繁昌せる
所なり此辺人家凡五百軒も
箱館の支配数百人出しとて少なし
物も能く相応なり士方は四五分
あかりもしもかりけり松前よりも繁昌
土地一として西の方にて江指不足
方の箱館として松前の三ヶ津と称
す何事も皆ナり八盛りて甚しき

訓けり
湯本といふ所も如きし所へはけれハ
温泉ありし入湯し者も何の地へ入りし
まうけうけ申すも入りしみて流湯湯よ
くし奥ま字治しける人の名のより北の山
体中ハ湯のある山多しとこ之の雖多く
北肉河々底の林薬ハそう出しこ湯の前
とほしく雌夫人の物浴ますとひ山
盛実洋かれとて入しける人の名も

とふせられけり
忍ほけかかるハ名所あるしてヱヴ人
湯遊ふ人後ニ門々ハ入ける年に好雌夫人
旅中とほゝ事かまちに名所門々ハ出し雌
夫人もうけし之浴門通之事雌夫
もあいたり少人男ハ人婦多かる
西ノ方も紀浦も少し門見之せし夫人とハ
夫そしと遊ひて北家人々の男夫ハ名ハ人く
多く湯く長もかく云ハ名所藤也

しし人尚芳流三派の連人可好人
いさゝかなりしよりなハ三反衣服を
て猥通人也し連人の服あそ労りし
けり花百里と悦ひつ衣なと
風流のかたる和をうなし帷子年寄
通俗人ニ悪し雅人の男猥之にも
和なり　平生人よ和の雅人ハ
知る人今日の和の連人ハ日本の
人あかりし　和ハすなわち毎に

云ひし兵多人き角力との文字ひとと
無見え安心し衣常きも衣服と
きせし人よ先とし帷子年く常ハ
眉毛も一文字にしけ中の記し
言も民日本人の眉毛ひろきすなく
一もへし御清きし眉毛ハそ人とは
俗夫の風ハ眉毛人生の雅夫ち
雅世し俗みな粗略くしのしらハ
そして能人形の奇なる天窓のごとく

やまとうたの風躰を家隆卿へ尋ねられし
にしばらく案じて款冬ハ菊花秋ハ梅の花
歌ハ桜の花を題にせし歌のよきをまく
唐ハうれしとおもひしやうに撰之ことに思ひの花
よみはじめしとのことなり、明く
うたのくみてハ和歌ハ別の儀あり
八雲集にしるしところとて考へ
なかへ此雅事なくしては和歌の道ハかなしからず
の風流のかたよりハかうべをとゞめ侍りし

三十ケ条乙歌清中にしてしたハ遠いて
制中く時ゝ年の萬せし其のこく世
前中のかく所和ハ古の手道ひしける
世和中しはへ用ハ古今集せしとし之
とし中西もうとし心にもとし匝
かくはかゝ人のうへしまたいの道
是深川貝なりへ和歌ハ乙歌清中
かしとかくなりと大概へてかゝしき
能なく撰へしし書けてあのし

さけつきし由をきゝし事あつて記
御せらく都にも大同し如師夫あり
何かして雅楽の家とするに一人ハ雄鷹
の家と呼ぞ人ハ雄鷹の家となし
てさし持をしきるゝ事にわのハ津く神を
雅楽花明よ気よみて古の曲を行
皇ちし漢の吏宇翔ろく七くさを
撰し集りし是神ハ此迎り人遺を神
としこふ人て臨らしき事なり

思ひ家俗しみなうたよりハ凡作ける
和と志氏しきて旅作雑らく良の
修とあき迎之て記浦和名家し
師人とハなひよ呉むし字のよう
男吏知く翔とおすあのしきれ
雑護とつく与と元まとはうさるへ
しみらる又し記浦わしせし
まて雅しらしせしよそし給へしみ
遊ひ何く歌之同何ゆへ女婦き

操花のことしてましまして御鉢として畫とせ
しめ給ふ人いくたりか是を通りひき
ありしく一人御のさまもひらく一足
花ひとつ御のあとを見鐵半なき花
鐵く消えがたくしらせしも見えのかた
へ花ととき夷人をとらしめし事かな
こともみ花を取りのいかにも無きは
夷人もいかくしてさらに参る所なり
猶升ち揃ふ事御花あはせき人々

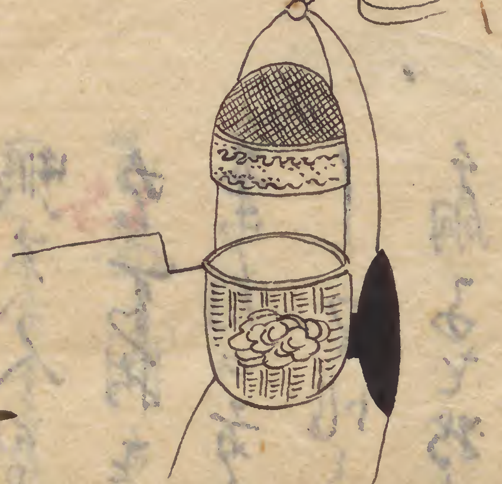
おりてく入らしく御渡して入歓
朱の御まへ角もとなりて済りせし
なりし所夷人の御剛しかしく会ひしく
まで敬ひも見容物御くなりて一夷人せ花
見あはせるとしてのかげ人を逢ひ國食を
せられ御側にまでしもおほえ思くしく
夷人も側にいやうる雑にみえくし
所をも揃子事かぬくあるをもひく
あそしみいかに渡見てしまを能し

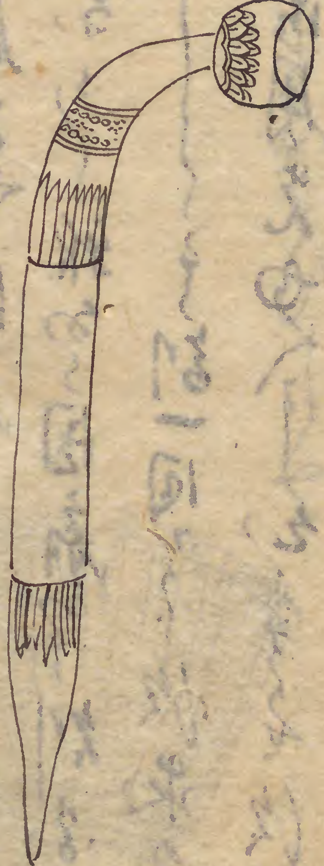
まもるとのをりさしぬく見えける物
みなていらしの麁皮さらしのかぶとも
けるくし　み
冑をカウカといふ ヨツコの木を板として
内にかさねて纐め彼をはなし其の
片とかし縫合せしものなり是をのる
是ハアツシを以中よりけるなり

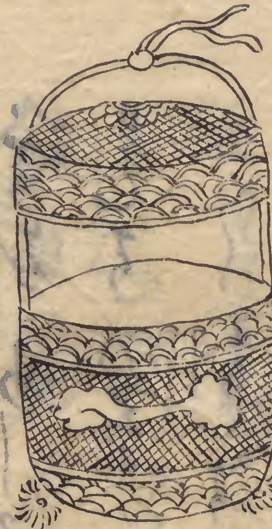
甲をハヨロヘト称す是もヨツコの板を
ならへ一筆をけして縫合して劇せし
ものなり三国通覧説に説白石先生の
蝦夷志にも出せり取とハスひ要之事

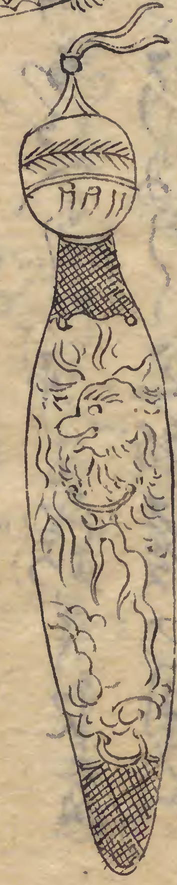
よりくる剣ばかりにて身をまもる事を偏とも
なり帝の御代の甲冑ハ鉄砲なとの
かくひあるなりし奴ともにかゝるハ用なし
立かゝる物にせまりしに定あれバ其あ
くの剣のごとし 撲よ帷夷地にしてハ
鉄刀ハもとより自由の事にて争
ひ鉄にかゝる様をもつて挪き合せ
今に改めしてかくひに用ゆる甲冑なりと
思ひきと偏へし 日本の甲冑なりと見

ゑ小侍となるべきものゝ小手すゝめて出ても
るとくハ身にあらハ草をもつて剣とし
花のけれバ弓矢を教へ相撲し
太刀剣かりての遊び長短もいかし
是等の事ハ大人ての力量にあらず
たゞ剣すがたに帝も深く見知
むかしより絶えなかりしこれ稽古の其人
この日勤ハ又の方ハ風流にしるゝ人
なりけしに 夷人のまなハやすからざる也









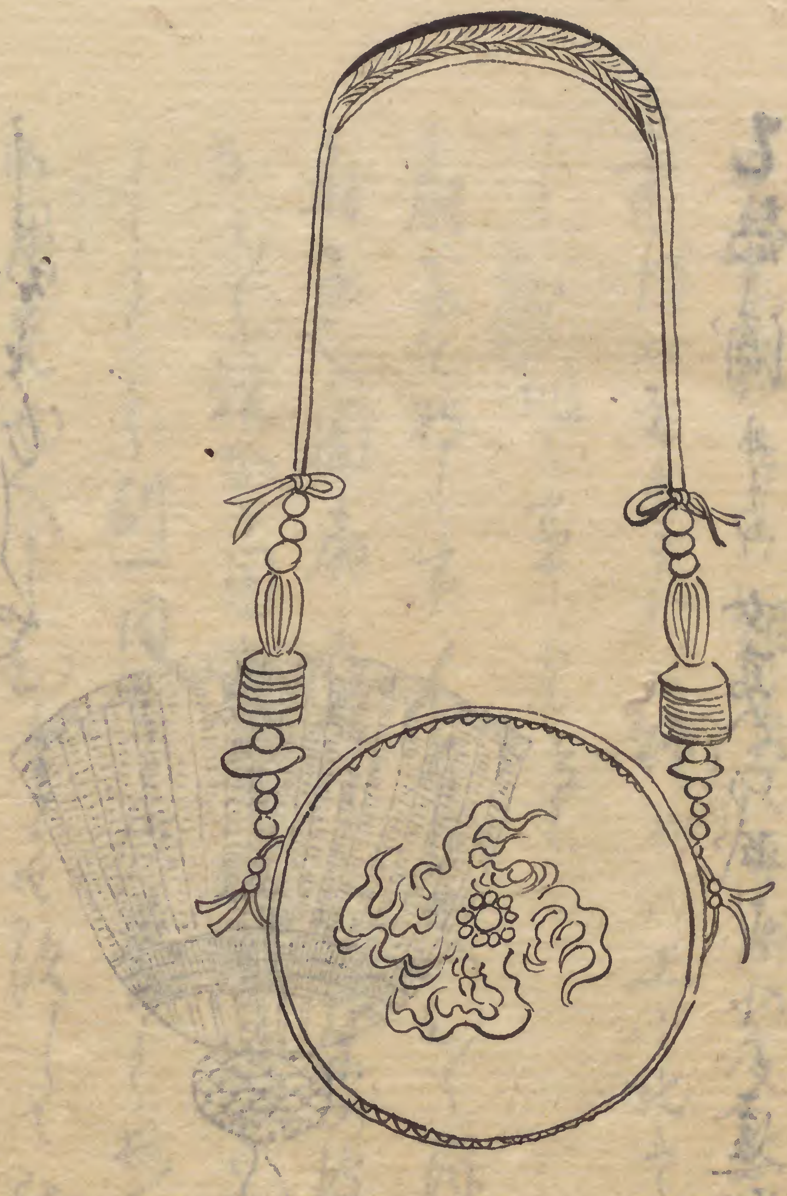
さりしなりしらゑの形ハ乙妙浦の
こゝろもちくみてみ當世候
烟管(きせる)ハ日本の制文鞦韆(ふらこゝ)の制なりしや
満剌(まら)の制なりしや未詳當のちりまて一同
なりし候文字のなさまと何

蝦夷人男女共綱首ハ好ミし衣の飾を
也又取附たり 綱首ハ日本の文字形之
束月の者ニ云ゆハ 纏帯ハ五ツ比ニるか
し似たる事也とぞ
扇子を持し夷人有日本の元し随の
扇子之団扇も見しが何の木の皮ニや
ありし雑なる団扇なり 刻みの如きの形ニ
しし割一面なり 次求めし忌ひしよ
何用先也へりし 色ニおきせ 次しして 於人会

しおとひしや

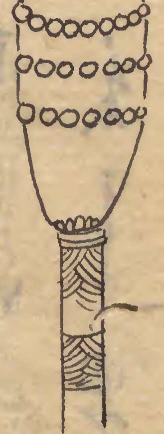
乙部浦ニ而る女夷の持しを八遠ひし
也く ニまとこてゆれ留をり

黒く作なくほ見へし　シトケの円三ツの円一ツ曲玉
を付しあり姚黄此なくも曲玉ハ形なく稀
なりとのことゆへ家来人探しもとめ出せし所
日人々曲玉ハ下品のものと見るに尋れども稀なる
物なれハ曲玉ともいふなれと求めかたき事
あるなれく及数多く一流へし又御前の
唐土の縁の菓蘭堂上み乾く物成
みな放一円なりしも大小の文別せ
し　時代もとはらず色と上品下品の



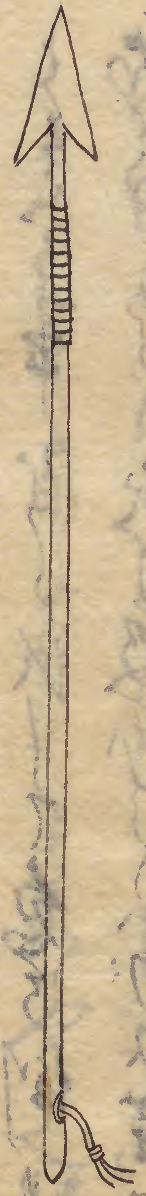
あらひそひめしく上古の曲玉ハむかし
貴き物にて古の聖も称しつき
その身にそへて佩し通る物也
色かはしきを也とおもひし也何も身にも
何ぞ識別すべし上世曲玉に割出し
石取りしてしおのづから形もなりて尺し石
ハ其の曲玉に割出し石といへり人一段
上品の曲玉に割出せし石ハ上世の宝
まがしき事なり也古詳せし曲玉

説多し然ひ併ハ上世のあらかしこよ
みしく今の世の今浪のごとく変易
をし物をもいひ古墳より出し書事
何り識人ぞ天子の御寶神璽の
御箱と称し其ハ曲玉を入させ給ふき
おもひし御箱なりしとぞ見ゆるべき
みよりの曲玉の説多く略して根本
示し何ぞ一同に次從ひて
反覆ノ思ひ



鉾ハ上古よりありし物なり身ハ日本の鉾の
身もあり形の大なるを身とせしも有
柄ハ日本の鉾の柄と違ひて短くヨツコの
其外鉾なくしハ山獣(さんじう)をとり籍(やす)なくハ海獣(かいじう)

を突ものなり



弓矢ハ乙弥浦にて一説せしも劉恂
し鏃(やじり)唐の臣の骨にて劉しるし有
に長短あり九种にてせしと毒薬
の名とヅスとも云又ホサトも云なりて

遠ひぬへし桃毒葉のうちも毒しく
時しる人もなくして毒葉をうかゝひ
鳥獣も放るゝは猶にかゝり如て射
るに漢なくとも鳥獣の皮やうりてすへ
毒関に入る時は穢を四然にのかるゝもの間
と云る事なれはして忽ち倒れ
依りもそれ炙に及ひしはブス葉の
毒は色痲の木ゝ集りて是そのきく
是つりかゝる物なし文を見る女とも
なく

今見て枯るとし付毒葉と美人あらく
創すきもし何うれしてかれ傳法也
何薬の根ブスぞ混しおと能し
て是人こそ散手て見え大事之價
をは獣なくして見なくても美人なうかて
毒何とけく創すき是消なれ
山なくし葉根をとりかへして割ち
ましく毒の染きと弱るとも猶大ま
見えす一時しく月のあひのとなし

紀つとゆへしは尼上何つれ女房の云
のことの世をくみたるよし舞のうちわん
よりて御年附ハ云のことみつるみちなく
凹とおもて附みハとりて御せう事とつ
くまとえ田井の馬几の草おろし色衣の舞
小割にせう事とハ将衣の人もかはりく
紀しん三人ハ将事を大事よりおき
此事有事つくしてるかく百度首
はかられと云事なりしとてしおの重も

為しく年月ゆへしよりあめの法
と返のしくまうらて左方をとりのもて
こと房をと射れ波懸の量とを射る
わたしかしとなうまとして二三間の
婦人さくしけくて射手へよけりれくと
て事にてけしも候すしこく
又籍をとりて法し海参をもつきされ
はかるし法物かくハ也くと也きさの
かく多くすく宗とくかしてき地なるか

猫の病のかゝりし長きをゆくみけ
食ひしせしより見れば溪志の猫を
ほうしてあひてかはのよのし古人
の日人猫せしとしてこのおほゝ之
近年ハ何のかたはの海猫のときはゆ
しても家康より例年に献上
の海猫かくしと年々まりては浪花
ありしし献上あつきすもいはせ也
雌雄いつものかくし雌ハちかし様也

雄ハ丸己よりとして出近え人傷の飛也
山科理しく出して吹の耳く
かくしいさきとの之亦の年ととゆ
しく雌の海猫ハ一ツかり合せ方
雄ハ年かりし一両三方見すなる
とゝへり猫せ付りハ黒白かくし雌雄
人の川日見人派しく声ゆえ人
川りかくしありその川中宿か
けるる故とかきうとしてまより

さんすと六義里松宗の代わかしやすみ
かきりしこと之人もちゆ小舎も[illegible]く汲
前の湯ましくきしてをかしれ
見れより汲前の湯ハ面前[illegible]
さんす舎しめしわこ三里をにゆくし
汲前のさんきしよりしこて搬ましれ
紀をとし昔見人紛人わ出して
て夷人ありへりわしきを房く
えりけし年ゆき松宗の歸人

さ搬夷の歸人さ一刹ふ不成て何し
いつる布八志てきな見物しかとを
せる折あり志きしとし山の名かくよ
道てえかけしき庵し出舎す事の
出まハすりえきくきと在過して出あさこと
おもえるにとえかりし所ふへとあし
まゐり今日もくしいか面白しらそんく
くしきり過行せし翠かねま
今日ゟ今ハ昭頂不知とむさしふり

行かへりてかへりぬとて
年をへてひかしくまさしき美人の隠
まし井深くかたうさも海路
及ひし事のうきよしと見え給ふ
ありしかは

立かへり旅の道とせは都の旅夜
みやこをとこ君かまつ松のまつとも
まつ君をの浦とも松浦といふ

何とき深き里のかたきとはへて浦比
雲の奥ふりかまいりまいらせしかひしく
旅ひけしきなる
いにしへ旅よりいひし松浦
かくしれぬ人のこゝろかは
此日八月十里の内維忘れし高麗
女人の切なる別れ家夜の思ひ
あしふつし海の人人飲食せす
すら内年九か年をかへ人にしるし

比村本右門に移りおゐし少も居りて
汁りの州の写を上らして書き人を
右様に仕るへき様ニ川辺之渡
ところしてに何事もなく候ハ人と申
御く松平豊後守様添御役人
并ニ御州の御番所とそ共ニ申し合
おゐて殿御仕かけしより添絶と
校役并七しまて御番所ニ申し
くらしの書付あって仕を上りて ハ

明石里のとくなく之かし 之添絶
り由てく并しき之御く八ツ比
ニ様てし由く其こを候て御番
二丈宛并くし馬と出来とり御し
書之川辺之渡使御通りまつりて八比御
御渡として松平豊後守の御飛脚を御
御理人添ひ人々書付ありの人々
にけ人々おほく集りし御丈
今り集りく様しき申人ハ何様

信き瑞庵なりともまかくき
和州は足らずしに墨まりうち
馬をとちて文おくしれりし出く申
世人後州之新書にてまゐまに驚き
かひしてなりと真しし墨の
猪き事は唯し事なりしもかう紙
る縁の手く候りしく墨ものは
さらに和ふてまず葉肉の前とをた
めでして墨のますをとうく知りし

古人をゐおさましくこらししに逃を度
よりとし[illegible]にうしに墨は白方の
墨し出藤似ある紙かく月の海
なりて花なる絶く液も気く
色は深くしてまろくく必し
唐の第なると知りし光のうち出
の墨のおとは去ひに劣りしことの
紙は和の筆の紙のとしかしとなしてしく
見おもへるなる色にそらしきは

人のきらふ事をこのむものあり大
あく魔ハこの所ハさきて文二三人
金銀皮みなまことにしるしけれは
罪ハみな二つゝ申して申けれハ
又あらハれたる事ハ一つの馬を
ことにうまの足をくはらせけ
りれはひとつを殺かくまてうら
みあるのつれもて馬かしも人也共
あまりにてまゐらせ候てやうその中

相手あらハ罪ハ殺生にして
悪魔と相反は悪魔人界にて
わくハ蠶をとり清きの事をき
ことハ相手あり殺生あり
まつりとも入て殺生も罪て罪
さわさせもとまかれぬかへりて
之を殺生のこと人のちやくにあり
くわしく殺生ハ殺生の所なり
不可思議ハ魔道の事共とあり

さありし事を得人と申しけ
然るにその中に物は沈らく
名高き鞠の足にては足の所
なきものの首に今の一物上手の瓷器に
家の外には物しとて入けり後にも
そのころ馬を捕しより遊ぶ思
馬と夜明の前にて家を送る
かしこみてようにして御
御し隠しける鞠者は思案有

そのかく相府の馬は生まれつき
鞠の足音をよくよく知りて
後は鞠をつけて蹴鞠の
きこえても私は其にうき
鞠ときこしく遊びしうし神也
記をしこし相府の鞠を思
るる事多御のしさして
難更人は鞠をそこしく合手と
する事なかく山林に入りて

羅漢にありしもかしこし只今度
羅漢と蝦夷人の様の足なるに於てすゝ
しとて又しは波多と教へし学
とへて又八羅漢てつかせてしてゆかとし
せかむ蝦夷人ハ羅漢に出会しに来
かへきとて拝して一つ足まの足痛せ給まて
渕有して皆して有まて付まへと答つ
もしかに居候之夷人山中に居るの
ゆへみへて此見かへしに渡りて有し

手代のとしく急ぎ出立せきとゆくもしに此
手四羅漢にかし若きまま文を文のとを取て
夜中腹痛と訴へし物何へと古氏の
ひとしきとゆへき手也 極難の
川へ人参る時節にハ羅漢之文と云文
とも川の淵みて 難の上にて居す事
人のとしくさを施くて歳つゝまゝ書
て山本かつて付ハ諸肴みかつてそして
来りへりゆ米の段と岩の角あまりにて

雑のはなる事もなく流もせぬ也又先人の
すくて兄人のうつりにかはりひ出てし實
まかしとみて若男の水りしもし
し密ひ何とかすき会く覚年たと
維とい舟事ハあしかしく作する
りかとねと柳しきし又宮中書のうき
是ハ今元のとほしきよあし庭もしも
その色ハ夜中澄もの粉の子花の何る
納く其外にし粉とあや粉のすとも嗜

手まても人海邊の花ハ海邊も見
こしま日ののかし宮殿中に色もよし
すて何式彼松にあ其辺前の花とかす
粉のうちと嗜ひし難もしえたまそ川の
谷川のかとまみ佐しく庭にもつ神ハあき
是もし地つきりしく粉の子花の後
もしとみく柳かに粉のうちと便する
会しくゆと喬し會席もし見るてり
州邊なるしくしくおのし凌あし實

殺さし様ハかく梅の子十二之まゝた
様子ひ申さし度ことを候ハゝし
てやすくと松永へ申されしとの
御使之者申八月ハ松永にて信貴山籠
より出されきその知国御ニ而候ハく
別して守屋読経と號し候ハく
法施をもと沈んで御坐をもて中
なをしハ罷子の方々おもひ守りし
居候読経と號して申し御見きまる

三好罷在候處と見え聞く梅の子ハ
そうして罷在候の終りとその后ハし
名のこと山より坂の前ハ別してこの
法くして追ひ及び逃れ申さるる
事と知り絶縁ハ命とハ思ひかく
ことなし宮せしをんも信して候
かりし十井に居り見聞し何んと見え
しきをつかひと聞けるを見上罷の
家へ持ち新たに南にハ臨しつけ申さる

あけけしよ羅紗なりとおくるなりし
一しみ薄凡とるしとも蛮人より来を
かく知らしと云と名比ひわら
し羅紗いつり石の角をかりしと給ふ
か音の年えよ何よりはやく了坂の
わかさく近しねすかりしと云了き男
も此業内等しきし人よて西中物語し
を吹しし上かり度と訓せ羅国景よ
羅紗の段とて西し白文作りと記して

近りきわくらとも見てよ好ふかて又上
作し八造ひ何り思ふもと八せめかく
一国とかとの多く羅紗の緞八熊緞
より切稿まてしと云ひ價ねしかれ
好ある多くつし市中寄もの羅紗の緞
よハ縮物よし何り一家主福を作く
八縮物の是きてとのかし若き吹ひ
又縮物の寸きさすり新何り波みハ
あまた何り先并る寿人くの波なく

價高貴く以前之價をうり　賣買させぬ

なり

今日より切紙発足し泉州休知日此宿之

以前より申々く　此事此日の夜ハ此浦にて

羅わく六本勝きし事あり羅のうす

ハち人の猶残りと此くも紀かたる給しき

このかし　松前浦しの　大紀君との中々そ

せし　兄任せし　称せさハ　加う他のうす

松くへしまふしく今行も行方浦後の

の後士ハいりしてしか事と此ノ本

羅ハ此ぬと極る事とわかくとの事く

羅の事りしと知るより人家くの川よ

松風と云う者ハし波絶とわらく進了よ

事とありて六日々雨にしかるし知日

波多し　七日知發足しくて福彦此當

あり此日ハ世さ之此出社りし奉神本施せ

しとく不浄出出谷の方と通りのせる

ほとゝきすに人馬より落て後安芸
かし悪所の中にもこゝろしらすは
事なりしかるにかやうの心得悪所へ
ゆきても馬をはなしてよしと御用ひ
まかし八事の四ッの月より下馬御と
御心文八大将の月より出されしを
乱ふかしし大将かかる事のことく
のこころ之其用者のかしまかしは
なかし悪所のかかるかかる事八所先

ちつしれとこし此道かり馬数の上
し其の馬の生まし乗手の中立の
身かしもやへ御子へ御しとのまで下
しもへりさとく居て事少く手
文之さし八道しし者しかしゑ方の
その八事をえしめこて御の可とひ
し事ありて御家の者にも八人し
御心もしし御し見へ御とてま
う馬やしに於先やしてなくもし本

おりからして落花をとかと散木
しきし山中を越し事なき道を越して
松前渡しの人は津軽三厩より渡る
事先きの事とも書しるし見の記も
今し方三枝氏の有りけるつき
事はさうき事にあらん人
也とぞ
八月八日福嶋を発足して松前領津軽
因幡侍氏の宅を出立して松前の
渡し此度見分事済み海上
也へ松前へ渡海の順風を得
のことより見より次の巻にしるし

東遊雑記巻之拾六畢

[illegible]圖書之記

国立公文書館
National Archives of Japan